

西郷隆盛翁の遺風一環

1) 西郷隆盛と同時代の人々の西郷評

西郷は政治家であり、軍人であり、詩人、行動の人として中岡慎太郎、坂本竜馬、勝海舟、福沢諭吉、山県有朋など同時代の人々により尊敬されました。これは、至難のことと言わざるを得ないと思います。

(現代でも同時代の人々から尊敬をえられる政治家は数少ないのではないかと思います)

同時代の人々の西郷評を含め下記の通り紹介します

①中岡慎太郎 (1864年末、土佐の同士板垣退助に送った手紙)

「当時 洛西の人物を論じ候えば、薩摩には西郷吉之助、人となり肥大にして御免の要石にも劣らず(土佐の一地名、要石は相撲取りのしこ名)、いにしへの安倍貞任などは かくの如きものかと思いやられ候。

この人学識あり、胆略あり、常に寡言にして、最も思慮勇断に長じ、たまたま一言を出せば確然人腸を貫く。かつ徳高くして人を服し、しばしば艱難を経てすこぶる事に老練す。その誠実、武市(武市半平太)に似て学識あることは実に知行合一の人物なり。これすなわち当世洛西第一の英雄にごぞ候」

②坂本龍馬の人物評

当時 天下の人物と言えば、徳川家にては大久保一翁、勝安房守、越前にては三岡八郎、肥後にては横井平四郎、薩摩にては小松帯刀、西郷吉之助、長州にては桂小五郎、高杉晋作。

③勝海舟 (1) 「氷川清話」より

西郷におよぶことのできないのは、その大胆識と大誠意とにあるのだ。おれの一言を信じて、たった一人で、江戸城に乗り込む。俺だってことに処して、多少の権謀は用いないこともないが、ただこの西郷の至誠は、おれをしてあい欺くことができなかつた。このときに際して、小ちよう浅略を事とするのは、かえってこの人のために、はらわたを見すかされるばかりだと思って、おれも至誠をもってこれに応じたから、江戸城受け渡しも、あのとおりに立談の間にすんだのさ。中略。官軍が江戸城にはいつてから、市中の取り締まりがはなはだめんどうになってきた。これは幕府はたおれたが、新政府がまだしかれないから、ちょうど無政府の姿になっていたのさ。しかるに大量の西郷は、意外にも、実に意外にも、この難局をおれの肩に投げかけておいて、いつてしまった。『どうかよろしくお頼み申します、後の処置は、勝さんがなんとかなさるだろう』といて江戸を去ってしまった。この漠然たる『だろう』にはおれも閉口した。実に閉口したよ。これがもし大久保なら、これはかく、あれはかく、とそれぞれ談判しておくだろうに、さりとはあまり漠然ではないか。しかし考えてみると、西郷の天分のきわめて高い理由は、実にここにあるのだよ。中略。

西郷の大度洪量について、維新当時のもようをもう少し細かにいうと、官軍が品川まで押し寄せてきて、今にも江戸城へ攻め入ろうという際に、西郷は、おれが出したわずか1本の手紙で、芝、田町の薩摩屋敷まで、のそのそ談判にやってくるとは、なかなか今の人ではできないことだ。あのときの談判は、実に骨だったよ。官軍に西郷がいなければ、話はとてもまとまらなかつただろうよ。その時分の形勢をいえば、品川から西郷などがくる、板橋からは伊知地などが

くる。また江戸の市中では、今にも官軍が乗りこむとって大騒ぎさ。しかし、おれはほかの官軍には頓着せず、ただ西郷一人を眼中においた。そこで今話したとおり、ごく短い手紙をやって、『双方どこにか出会いたるうえ、談判いたしたい』との旨を申し送り、また、『その場所は、すなわち田町の薩摩の別邸がよろしかろう』と、こっちから選定してやった。すると官軍からもすぐ承知したと返事をよこして。いよいよ何日の何時に薩摩屋敷で談判を開くことになった。

当日のおれは、羽織袴で馬に乗り、従者一人をつれたばかりで、薩摩屋敷へでかけた。まず一室へ案内せられて、しばらく待っていると、西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の引切り下駄をはいて、例の熊次郎という忠僕を従え、平気な顔で出てきて、『これは実に遅刻しまして失礼』と挨拶しながら座敷にとおった。そのようすは、少しも大事を前に控えたものとは思われなかった。さて、いよいよ談判になると、西郷は、おれのいうことを一々信用してくれ、その間一点の疑念もはさまなかった。『いろいろむつかしい議論もありましょうが、私が一身にかけてお引き受けます』西郷のこの一言で江戸百万の生霊（人間）とその生命と財産とを保つことができ、また徳川氏もその滅亡を免れたのだ。もし、これが他人であったら、いやあなたの言うことは自家撞着だとか、言行不一致だとか、たくさんの兇徒があのとおり処々に屯集しているのに、恭順の実はどこにあるかとか、いろいろうるさく責めたてるに違いない。万一そうなると、談判はたちまち破裂だ。しかし西郷はそんなやぼはいわない。その大局を達観して、しかも果断に富んでいたには、おれも感心した。

この席、おれが殊に感心したのは、西郷がおれに対して、幕府の重臣たるだけの敬礼を失わず、談判のときにも、始終坐を正して手を膝の上へのせ、少しも戦勝の威光でもって敗軍の将を軽べつするというふうがみえなかったことだ。その胆量の大きい事は、いわゆる天海海闊で見識ぶるなどいうことは、もとより少しもなかった。

勝海舟（2） 西南の役での西郷の死を悼んだ詩

ぬれぎぬを 干そうともせず

子供らが なすがままに 果てし君かな

-勝海舟-



④福沢諭吉明治著「10年 丁丑公論」より

西郷は兵をあげて大義名分を破りしといえども、その大義名分は今の政府に対しての大義名分なり、天下の道徳品行を害したるものにあらず。中略、西郷は士族を重んずるは事実には疑いなしといえども、ただその氣風を愛重するのみにして、封建世録の旧套に恋々たるものにあらず、もし、彼をして、封建世録の友たらしめなば、そのはじめ、徳川を倒すのときに、己が数代恩顧の主人たる島津家を奉じて、將軍たらしめことを勉むべきなり。これを努めざるのみならず、維新の後はおかえって、島津家の首尾をも失い、かつ参議なりし時は廢藩置県の大義にもあずかりて、大に力ありしは、世人の普く知るところならずや。廢藩は時勢の然らしむのものはいへ、当時もし、西郷の一諾なくんばこの大業も容易に成をきすべからずや明らかなり。

⑤山県有朋の西郷評：安藤英男著「西郷隆盛」より：

「廢藩置県の断行における西郷の果斷明快なる決断力」

長州藩の山県等が起案した廢藩置県案（藩知事からその土地の領有権を奪い取るもの）に対し、西郷の去就こそが成否の鍵である。山県が隆盛にはかると「それはよかろうが、木戸の意見はどうか」とたずねた。山県が「あなたの意見を聞いた上で、木戸に相談する事になっています」と答えると「それはよろしい」といった。あまりに対応が早く、また簡単な挨拶なので山県はさらに念を押して「この問題はじつに重大ですからどうしても血が出ます。その覚悟をしなければなりません」というと、やはり隆盛は「わしはよろしい」と一言いったのみであった。（これは明治4年6月30日か7月1日）山県は、大いに感激して早速同志に報告した。これを聞いた木戸も大いに喜び、その日記に「西郷、断然同意の返答を聞き、大いに国家のために賀し、かつ前途の進歩も亦、これより一層なるを楽しめり。」（明治4年7月7日）と記している。また山県も「実に私もこの時は西郷を見上げた。西郷という人はどうしても非凡の人間である。その果斷明快、よく事の利害を察し、そうしてよくこれを実行する力を持っているというのは、到底尋常の人間のできない事である。」と述べている。

明治4年7月9日木戸邸で 密議 薩摩側 西郷、大久保、従道、大山 長州側 木戸 井上、山県が出席議論の主眼は廢藩に反対している雄藩をどう押さえこむかであった。一座の連中があれこれ不安を言い合っていた。そのとき遅れてきた隆盛が、言葉すくなく発言した。「勅令が出てから、もし暴動でも起きれば責任を以って鎮定します。自分が市谷の兵舎に寝起きしている限りご心配なくおやりなさい」之で議論は一決して三条、岩倉にも同意とりつけ7月12日一同参朝して天皇に決済を仰いだ。この歴史的な大令は7月14日公布された。

廢藩置県に先立つ明治3年12月勅使として岩倉が大久保、木戸、山県随行し、薩摩・長州に派遣された。（朝廷のため尽力すべしとの勅旨を両藩主に伝えられるため）その折、当時鹿児島に帰郷していた西郷から薩摩・長州・土佐からなる近衛兵創設の提案がなされた。（明治4年6月上京、西郷はこの近衛兵と共に市ヶ谷の尾張藩邸に起居を共にし、廢藩置県の断行にのぞむ）

⑥ 渋沢栄一 「将に将たる大器」 西郷南洲顕彰館資料

いわゆる恩威（優しさと厳しさ）並び備わるといってお方であった。また、賢愚を超越した大人物。その包容力に富んだ大度量と不言の間で実行される果斷と他人のために一身を顧みない同情心義侠心とその他いろいろの方面から観察すれば、真に 将に将たる大器 を備え居った偉人であった。

(渋沢栄一は西郷留守内閣で参議西郷の下で大蔵省の役人として仕え、明治6年に退官)

⑦ 島津斉彬 「薩摩の大宝」なり

私、家来多数あれど、だれも間にあうものなし。西郷一人は「薩摩の大宝」なり。しかしながら、彼は独立の気象があるが故に、彼を使うもの私ならではあるまじく・・・。

2) 現代における人々の西郷評

現代において 外交官 岡崎久彦氏、東大名誉教授 山内昌之氏、作家 福田常雄氏等多数の識者が西郷翁の行動並びに遺訓は時空を超えて今の日本人の琴線に触れると論評しています。

岡崎久彦氏、山内昌之氏、福田常雄氏の発言を紹介。

① 外交官 岡崎久彦著 「100年の遺産」より

この西郷が官軍を代表し、徳川側を代表する勝との間で江戸城の平和的引渡しをしたのが、歴史の白熱する瞬間です。これで江戸 100 万の市民は戦火をまぬがれ、徳川の幕臣は生活の資を得ます。

それよりも何よりも、日本国内の分裂に乗じようと爪牙を研いでいる帝国主義列強の干渉を排除し、日本の独立と領土の保全を果たします。西郷は英国からの援助の申し入れに対して、「日本の事で外国に援助をしてもらうような恥ずかしい事は到底出来ない。」と断り、勝はロシアからの資金援助を断っております。

後年、清国の李鴻章がロシアから賄賂をとって、満州駐兵を許したのが清朝が瓦解の大きな契機となった事を思うと、日本がこの時期にかくも傑出した人物 2 人を持った幸運に改めて思いを致さざるを得ません。

(注：英国側より西郷に対して「フランスが幕府を援助して薩摩長州を征伐し様としているので、薩摩が希望すれば兵力を出して援助する」との申出度があり、これに対して西郷が断った。

此の事は、1867年西郷が桂久武、小松帯刀に手紙を出した内容と符合する)

② 東大名誉教授 山内昌之、

西郷遺訓「正道を踏み国家を以て斃るるの精神なくば、外国交際は全かる可からず、彼の強大に畏縮し、円滑を主として、曲げて彼の意に従順するときは、軽侮を招き、好親却て破れ、終に彼の制を受るに至らん」

(『西郷南州遺訓』一七) 西郷隆盛の遺した文章のなかでも、日本の外交環境を憂えたこの言葉ほど、時空を超えて今の日本人の耳朶を打つものはないだろう。(民主党政権時代の発言)

③ 福田常雄著 「南州手抄言志録 101カ条」より

西南戦争を調べていくと、実に感じのいいもぎたての果実のように新鮮な人間達に沢山出くわします。いずれも今は見当たらない日本人達です。彼らこそ江戸時代が残した最大の遺産だったのです。その精神の名残が明治という国家を支えたのです。

3) 宗教家による西郷評

①内村鑑三による西郷評

1908年内村鑑三は「代表的日本人」(Representative men of Japan)を英文で書き、5人の代表的日本人を世界に向かって発信され、世界に驚きと称賛を持って迎えられました。

冒頭に西郷さんが登場します。次いで上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮が紹介されています。

西郷隆盛は人間を超えた存在である「天」に出会い、その導きに従った人と紹介されています。西郷さんの生涯をたどる文章なのに、人間を超えた力の主体である天(Heaven)が主客で西郷はそれにつき従うという構造になっています。

天の声を聞くための人生の道行として、西郷さんは「敬天愛人」を説きます。

静寂な杉林のなかで「静かなる細い声(Still small voice)」が西郷を地上に遣わされたことをしきりにささやく」と内村鑑三は表現しています。

これは旧約聖書で神が預言者(予言は未来を言い当てることですが、一神教の預言者は神から預託された言葉を現在に向かって発する人)に呼び掛ける神の声を描く表現です。西郷さんが大きな決断をする時、人との対話でなく天との対話によって見出したと内村鑑三は言いたいのだと思います。(若松氏意見)

西郷が本当の革命家たり得たのは無私になり得たからであると内村鑑三は語ります。「西郷なくして革命(明治維新)は可能であったかとなると、疑問であります。木戸、三条を欠いたとしても革命は上首尾ではないにせよ、多分実現を見たであります。必要だったのはすべてを始動させる原動力であり、運動を作り出し「天」の全能に基づき運動の方向を定める精神でありました」と内村鑑三は表現しています。

注1) 内村鑑三は明治時代のキリスト教宗教学家、思想家。1877年札幌農学校時代キリスト教洗礼を受ける。1884年アメリカ留学。

注2) 上記説明はNHKテレビテキスト「内村鑑三、代表的日本人」に関する批評家若松英輔の説明参照。

②五井昌久による西郷評：

1973年に書かれた五井昌久著「日本人の心」には10名の日本人が紹介されており、その冒頭が西郷さんです。次いで、吉田松陰、聖徳太子、芭蕉、白隠、良寛、黒住宗忠、裕仁天皇、植芝盛平が紹介されています。

「西郷さんと言う名を聞くと、いつも私の胸がじいんと熱くなってくる。これはキリストとブッダを思う時と等しいほどの畏敬の念から来るものです。

それに加えて人間としての親近感があるのです。西郷さんの魅力は「およそ事をなす、すべからく天につかうの心有るを要すべし」と述べているように

常に天の心と一つになっていた私心のないおおらかさ、その正しさ、其れにたぐい稀なる胆力にあると思います。天とは神と言う事でもあり、調和を目指してなされている宇宙の運行と言う事でもあります。天を敬い、人を愛し、正しき事には身命をなげうって立ち向かう、誠実真行の西郷隆盛。武人の中で最も尊敬するのが西郷さんですが、武人と限定するより、偉人という言葉がそのまま当てはまる人です。こうした大偉人の再び現れることを待ち望む気持ちが切々するのであります」と「日本人の心」で述べられています。

注) 安岡正篤が五井昌久を「霊覚のあるしかも法力のある無欲な宗教家の第一人者」と評している宗教家)

4) 西郷隆盛の人材登用——東郷平八郎を海外留学——

イギリスに官費留学する際、最初は久保利通に「留学をさせてください」と依頼したが色よい返事はもらえなかった。次に西郷隆盛に頼み込んだところ、快諾を得て、ほどなく東郷のイギリス留学が決定した。(留学1871年から1978年) 此の事が後の日露戦争なかんづく日本海海戦で日本を救う事になる。

帰国途上、西郷隆盛が西南の役で自害したと現地で知った東郷は、「もし私が日本に残っていたら西郷さんの下に馳せ参じていただろう」と言って、西郷の死を悼んだという。

日露戦争、特にそのクライマックスである、東郷平八郎連合艦隊司令長官指揮下の日本海海戦関連事項を次に記載。

世界の歴史的5大海戦

日露戦争(日本海海)は世界の5大海戦の一つに数えられている。

紀元前480年 サラムスの海戦(ギリシャがペルシャを破る)

1571年 レパントの海戦(キリスト教連合軍がオスマントルコを破る)

1588年 アルマダの海戦(イギリスがスペイン無敵艦隊を破る)

1805年 トラファルガー海戦(イギリスがスペイン・フランス連合軍を破る)

1905年 日本海海戦(日本がロシア・バルチック艦隊を破る)(日本海海戦は石炭を燃料として使った最後の大海戦)(イギリス海軍は1912年 戦艦の燃料を石炭から石油に転換、その後世界の船舶用燃料は石油が主流となる)

歴史的背景

19世紀末は帝国主義による世界分割が激しく、東アジアでは、日清戦争に敗れた清に対して列強が支配地を拡大していった。

19世紀からこの時代にかけて、世界の国家や地域は、他国の植民地になるか、産業を興して軍事力を持ち、帝国主義の仲間入りするか、その二通りの道しかなかった

日本は1905年日清戦争で遼東半島の割譲を得たが、ロシア・フランス・ドイツによる三国干渉で遼東半島(含む旅順)を放棄せざるをえなかった。(日本の臥薪嘗胆)

ロシアは遼東半島の最重要拠点の旅順を占領し、ここにロシア太平洋艦隊の軍港を建設、し、シベリア鉄道と結ぶ東清鉄道(ハルピン——旅順間)敷設権を確保し、旅順までの輸送路を確保した。一方中国東北の満州にはロシアの大軍が居座り、また、鴨緑江を超えて進出、両国間の緊張が一挙に高まり、日露戦争に突入していった。

日本が敗れたら、満州・朝鮮(当時の国名)はロシアの勢力下におかれ、日本もおそらく沿海州の一部になったか、あるいは当時の国際力学から日本列島は列強諸国の草刈り場になることも予想された。

日露戦争の最終的に戦局の行方は海軍の最終決戦である東郷平八郎連合艦隊司令長官率いる日本海海戦にゆだねられたのである日本国家の存亡をかけ、又、アジアの行く末に大きく影響した日露戦争のクライマックス

であった。

日本海海戦勝利後の世界の反響次の通り

インドのネール（当時15歳）：日本の勝利は私の熱狂を沸き立たせた。インドを欧州の従属から解放放つきっかけとなる。

インドの新聞：日露戦争の日本の勝利が西洋に対する幻想を解消した、インドのようなおとなしい羊でも虎に変身できる。

中国の孫文：東方の有色民族が西方民族を破った歴史的快挙。日本の勝利が有色人種や大国の圧政に苦しむ諸民族民族独立の覚醒を与え、ナショナリズムを急速に高めた。

ロシア：世界最初の共産主義国家誕生の導火線。

アジアの進出を阻止されたロシアが西へ向かいそれが第一次世界大戦の要因の一つ。

アルゼンチン観戦海軍大臣コメント：トラファルガー海戦はヨーロッパを救い

日本海海戦はアジアをロシアの支配から救った。

イギリスのデイリーメール（5月30日）：「日本海海戦での日本の勝利に比べれば100前のトラファルガー海戦での戦勝は小さい出来事だ」

ベトナムのファン・ボイ・チャウ：日露大戦の報、夜の夢を破る、実に私たちの頭脳に一世界を開かした。

エジプトのカミール：自らも世界も不敗と信じていた国ロシアを破り、殆ど信じ難いまでの勝利を収め、生きとしけるものに衝撃を与えることとなったこの民族とは一体何者なのか。」

トルコの観戦武官ペルテブ・バシヤ：国家の命運は国民の自覚と愛国心で決するものであり、トルコの未来も日本を見習い近代化をすすめるならば、決して悲観するべきでない。国家の命運は国民にあり。

トルコ：日本の勝利が、近代化を推進するケルマ・アタチュルクの革命に連なった。

イランの詩人ホセイン：東方から、何と言う太陽が昇ってくるのだろう。

眠っていた人間は誰もがその場から跳ね起きる。

フィンランド；日本の勝利がフィンランド人に独立の夢を与え1917年12月に帝政ロシア崩壊を好機を利用してロシアから念願の独立を達成した。（東郷ビールの誕生）

米国新聞サン：日本海海戦は文明社会の大勢を一変するに至らしめた。

セオドル・ルーズベルト大統領より友人金子賢太郎へ「自分は心から大勝を祝福する。世界未曾有の勝利である。情報に接するや、神経が高ぶって、公務を処理するの念を忘れ海戦の情報を来訪者と談話して終日を送っ

た。

アジア・アフリカが完全に欧米植民地支配に飲み込まれ、欧米の圧倒的植民地の波が中国大陸、朝鮮半島に迫りつつある時に、アジアの新興国の日本が始めて反抗に転じたのが日露戦争であり、そのクライマックスが日本海海戦であった。

以上